

高橋 他一（本吉郡気仙沼町）	及川篤三郎（登米郡新田村）
浅野 佐吉（登米郡米谷村）	柴山 捨治（栗原郡有賀村）
菅原 梅作（本吉郡気仙沼町）	三浦 十吉（本吉郡十倉村）
高橋 彦市（栗原郡高清水村）	大場 喜作（栗原郡築館町）
千葉 宗平（登米郡石越村）	二階堂富十郎（登米郡上沼村）
小野寺熊三郎（登米郡石越村）	渥美 貞亮（登米郡米山村）
穴戸五郎左衛門（登米郡南方村）	田中 善治（登米郡登米町）
熊谷 運蔵（本吉郡新月村）	佐藤 富蔵（登米郡米谷村）
千葉勘三郎（登米郡宝江村）	伊勢 浅治（登米郡米谷村）
高橋 多蔵（栗原郡鷺沢村）	金田 陽治（栗原郡金田村）
千葉慶三郎（登米郡石森村）	小野寺庄右衛門（本吉郡松岩村）
鈴木清左衛門（栗原郡金成村）	加藤八重治（本吉郡新月村）
後藤陽五郎（登米郡南方村）	猪股源太郎（登米郡宝江村）
小野寺辰之進（本吉郡新月村）	後藤庄三郎（栗原郡鷺沢村）
白鳥新兵衛（栗原郡築館町）	佐藤正右衛門（栗原郡大沢村）
斎藤安右衛門（栗原郡清滝村）	春日林太夫（登米郡宝江村）
氏家善四郎（栗原郡宮沢村）	清野幸太郎（本吉郡気仙沼町）
佐藤吉内（栗原郡長崎村）	三塚市右衛門（登米郡新田村）
◎後藤房之助（栗原郡姫松村）	村松 文哉（牡鹿郡渡波村）

○は救出後死亡 ◎は生存者

資料 萩野家遺稿（落合直文）

落合直文集（落合直文）

定本日本の軍歌（堀内敬三）

〔この回答を採り入れ NHKが制作したテレビ番組「八甲田の証言」が、昭和46年6月9日仙台中央放送局から東北管内に向けて放送された。その後昭和48年発行された「近代東北庶民の記録」（NHK仙台制作グループ著）に、これが収録された。〕

65. 日本フィギュア・スケート 発祥の地

問 五色沼が、わが国フィギュア・スケートの発祥の地と聞きましたが、それはどうしてですか。

答 スケートが、わが国に始めて入ってきたのは、文久元年〔1861〕函館〔当時の箱館〕に来た英国人トマス・ライト・ブラキストンが本国から持ち込んだのだとも、明治10年〔1877〕札幌農学校の米人教師ブルックスが自国から持ってきて滑ったともいわれています。これをまねた、かすがい形の下駄スケートや原始スケートが造られ、少年達の冬の遊びとして各地に広まって行きました。屋内リンクなど夢想だもできなかった昔のことです。仙台でも大手門前の五色沼が冬期間は凍結して、恰好なスケートリンクとなります。ここで「たっぺすべり」と称して氷滑りが楽しまれていました。旧制二高生等は、靴に国産のスケートを真田紐〔さなだひも〕でしばりつけて滑っていたといわれます。このスケートは、南町の橋本という店から「仙台スケート」の名で売出され、次第に普及していきました。やがて、明治38年の頃ここで本格的なスケートを始めたのが、佐藤幸三・田代三郎で、この二人がフィギュアスケートをやりはじめました。そして旧制二高入学後、同期の河久保子朗と相知り、スケートの原書を読んだり、アメリカ製のスケートを取りよせたりして、研究と実技に励みました。「第二高等学校史」（第二高等学校史編纂委員会編）に『尚志会史にはスケート部は大正元年設立とある。しかし、明治年間すでに有志スケート部は存在していた。河久保子朗氏（明治44二部乙）は明治42年頃青葉城下の五色沼で英人宣教師たちがフィギュアスケートをしているのに魅せられ、二高の友人数名とスケートを始め、二高のドイツ語教官ウエルヘル先生にフィギュアスケートの手ほどきを受けたという。日本フィギュアスケートのパイオニアは実にこれら二高生であり、二高スケート部は輝かしい前史を有しているのである。』とあります。文化史研究家が河久保子朗を「日本に於ける近代スケートの創始者」といっています。この河久保子朗はその後数巻の著・訳書を出して外国のスケータングを紹介し、実技の模範を示すことに努めるほか、日本スケート会を創立するなど、日本のスケート界をレベルアップして世界に通ずるものとした最大の功労者です。こうしたことから五色沼は「日本フィギュアスケート発祥の地」とされるのです。五色沼は戦後進駐軍に接收され、その後狭く埋立てられてしまい、リンクとしての適地ではなくなつたので、このことも次第に忘れかけられてきました。

注(1) 明治22年3月11日六郷村井土〔現在は仙台市内〕に生れた。旧制二高から東大医学部を卒業して、東北大医学部講師となったが、後に北四番丁に内科医院を開業した。傍ら仙台スケート協会長・県医師会長・仙台市公民館長・仙台市公安委員〔自治体警察当時〕等を歴任して幅広い貢献があったが、昭和34年6月13日急逝した。

注(2) 五色沼では、フィギュアだけでなく、スピード・スケートも盛んに行われた。そして五色沼だけでなく、郊外の與兵衛沼もリンクとして使われるようになり、遠く仙北の長沼・伊豆沼に進出するものも現われるようになった。佐藤幸三・田代三郎・河久保子朗らが東大に進んだ後も、旧制二高・一中・二中生らが練習に励み、大正の後半には多くの学生選手が生まれて活躍した。大正12年には、佐藤幸三を会長とする仙台スケート協会が創立された。五色沼で行われた全国的な行事の主なものには、昭和3年1月末の全日本フィギュアコン

テスト大会、昭和6年オリンピック予選をかねたフィギュアスケティング全日本選手権大会などあった。

資料 宮城県史第18巻

第二高等学校史（第二高等学校史編纂委員会編）

66. 仙 台 み ち

問 最近朝日新聞社から発行された、元年寄佐渡ヶ嶽の聞書「チャンコ修業ーある親方の話ー」に「仙台みち」ということが出てきますが、仙台ではそのような特殊な道のりを使ったのですか。

答 おたずねの個所には、次の通り書いてあります。『一里は三十六町なのだが、巡業先で面くらったのは四国と仙台だった。四国の巡業でハネダチ、二里近く歩いたのに一里だよといわれた。わしは初めてだったんだが、兄弟子たちはニヤニヤ笑いながら、さァもう少しだという。ウンだと思ったが一里という標識みたいなものが出ているんだ。ところがそれから一里歩かないうちに目的地に着いてしまった。三里半の予定だったんだから呆れたが、あとになってこの一里は五十町で、土地では巡礼みちというんだと聞いた。わしらよりも歩く巡礼さんは、五十町を一里として、限りなく道を歩くだろう。……この巡礼みちと逆なのが仙台みちだ。「今日の道中は十八里」とおどかされたことがある。それが三里だったんだ。つまり六町一里なんだ。わしらが知ったのは大正初期で、昔から六町一里と聞かされたんだから、古い時代からの言伝えなんだろう。それでわしらの仲間では「仙台みちをいうな」とか「こいつ仙台みちいいやがる」などと、いいかげんというような意味に使ったもんだ。だから相撲取だけの六町一里じゃないんだが、いまの仙台の人は知らないらしい。伊達藩時代からの町の名も消えていくだろうが、わしらにはなつかしい思い出だ』。

以上の文面からしますと、「仙台みち」と呼ばれる特殊な道のりが、仙台〔昔仙台領といわれた広い範囲の仙台〕全体で使われていたかのように取れますが決してそうではないということに注意を要します。ただし仙台領では、三十六町一里を大道、六町一里を小道といい、仙台以南の道のりには大道を、仙台以北の道のりには古来からの小道をそのまま用いるという使い分けをしてきたので、小道の方を「仙台みち」と他称されることがあるのです。幕末の地理学者古川古松軒が「東遊雜記」⁽¹⁾に、このことを次のように記しています。『仙台北下より北の方は、今に夷の風俗ありて万事異なること多く、行程も五町一里、六町一里、七町一里など、所どころにて替りたるに、仙台北下より南は、行程も三十六町を以て一里とし、諸事の風儀上方に似て、賤しき馬士などもさかしく見えことなり』。奥道中〔仙台以北の街道〕で小道を用いていたことは、「をのゝえ草稿」（松窓乙二、